

## 第7回研究実践奨励賞

### 立教大学コミュニティ福祉学会 第7回「研究実践奨励賞」選考報告

研究実践奨励賞選考委員会

第7回「研究実践奨励賞」、通称「まなびあい賞」は、以下の2作品に決定致しました。

- 1) 大橋理美氏（福祉学科 2020 年卒業、社会福祉法人滝乃川学園）  
富田文字子氏（元福祉学科教員、埼玉県立大学保健医療福祉学部社会福祉子ども学科）  
「青年期・成人期重度知的障害者の自己決定支援の在り方に関する研究—支援者による自己決定支援の阻害要因と利用者に対する影響—」〔論文〕
- 2) 島田将太氏（コミュニティ福祉学科 2005 年卒業）  
「コロナウイルスによる相談者の変化と、これからの相談支援機関の担う役割」〔現場からの声〕

以下、同賞の趣旨を再確認した上で、今回の選考体制および選考過程、受賞作品の講評などを報告致します。

#### 1. 「研究実践奨励賞」の趣旨

「研究実践奨励賞」（まなびあい賞）は、コミュニティ福祉学会の学会誌である『まなびあい』に掲載された作品のうち、コミュニティ福祉学部の学部生、大学院生、卒業生、修了生などによる優れたものを選び、表彰して奨励するものです。また、研究や実践を奨励することで、『まなびあい』を多くの方に読んでいただくとともに、卒業生、修了生と在学生の交流をより一層深めるために設けられたものです。

#### 2. 選考体制および選考過程

2021年6月18日（金）に開催された「選考委員会」において、選考対象となる作品（第13号掲載の8作品）に対して、真摯に受賞作品の選考がなされました。選考の詳細は以下の通りです。

##### 【選考基準】

例年の選考基準となっているのは以下の2点です。第一に、研究論文については、学術論文としての完成度に囚われるのではなく、多少粗削りな作品であったとしても、潜在的な発展可能性を実感させるものであること。第二に、実践記録・報告やエッセイなどについては、「コミュニティ福祉学部のマインド」を実践していることについて、支持や共感ができるものであること。

今回も例年の選考基準を参考に、研究、実践の領域での作品を対象として、学問的水準のみを基準に選考にするのではなく、読者のこれからの研究、実践を促すような視点をもった作品を選考することとしました。

#### 【選考体制】

選考委員会は、まなびあい運営委員会委員と、選考の公平性を担保するために外部選考委員1名によって構成されました。今回の外部選考委員として、平井太規先生（コミュニティ政策学科）に依頼し、選考に参加していただきました。

#### 【選考対象作品と結果】

学会の規定に基づき選考の対象となった作品は、『まなびあい』第13号（2020年10月30日発行）に掲載されているうちの8作品（学部生、大学院生、卒業生、修了生などが執筆した論文・エッセイ・現場からの声・在学生の活動報告・卒業生の活動報告・リレーメッセージ）です。選考委員会の開催に先立って読者（主に在学生）から提出されていた推薦書の集計結果（得票数、評価項目、推薦理由コメント）も参考にし、議論をしました。

まず、各選考委員が受賞にふさわしいと考える作品とその理由を報告して候補を絞り、さらに自由に意見を出し合って議論をしていきました。今回は投票による多数決ではなく、議論を進めていく中で、大橋氏・富田氏と島田氏の2作品を受賞作品とすることが決定致しました。

### 3. 受賞作品の講評

- 1) 大橋理美氏・富田文字子氏著「青年期・成人期重度知的障害者の自己決定支援の在り方に関する研究—支援者による自己決定支援の阻害要因と利用者に対する影響—」について

大橋氏の卒業論文を加筆修正したこの作品は、青年期・成人期重度知的障害者の自己決定支援の方法を明らかにしようとした研究論文です。自己決定支援において利用者の「どちらでもいい」という意志を支援者が認識することの必要性について言及している点は、読者に新たな気付きを与えるものであり、学生読者や選考委員から評価を受けました。また、コミュニティ福祉学部での学びの集大成である卒業論文として、学生時代の到達点のロールモデルにもなり学生読者に好影響を及ぼすことなど、卒業論文としての完成度・質の高さを評価する意見もありました。

- 2) 島田将太氏著「コロナウイルスによる相談者の変化と、これからの相談支援機関の担う役割」について

この作品は、総合相談支援機関に勤務する卒業生が相談支援機関の実際の活動について報告した「現場からの声」です。コロナ禍の影響にも言及していることから、今の時代を反映している、記録として残ることを考えた時に価値がある、コロナ禍の現場と分析の両方が記載されているという点を評価する意見がありました。また、コミュニティ福祉学部の理念に近い考察がされている、大学時代の学びにも言及している、読者のこれからの研究を促進させる、読者への影響力がある点も評価され、実際に学生読者からは、大学で学んでいることや将来の仕事の参考になるという推薦理由があがっていました。

#### 4. まとめ

今回の選考対象が8作品あったことは有り難いことですが、受賞作品を選考することに難しさもありました。作品が論文・エッセイ・現場からの声・在学生の活動報告・卒業生の活動報告・リレーメッセージと多様だったからだけでなく、いずれの作品も読み応えがあり何らかの特長があったためです。その中でも結果として、コミュニティ福祉学部らしく、読者への影響力がある点を評価された作品が研究系と実践系から1つずつ受賞作品となりました。大橋さん・富田先生、島田さん、受賞おめでとうございます。